母子看護学臨地実習における段階的実習と選択的実習の効果

Effect of Stepwise and Selective Style on the On-site Clinical Training of Maternal and Pediatric Nursing

草　薙　美　穂　　茎　津　智　子　　佐　藤　昇　子
Miho KUSANAGI　　Tomoko KUKITSU　　Shoko SATO
澤　田　優　美　　田　中　さおり
Yuumi SAWADA　　Saori TANAKA

要旨

A 大学看護学科では 2012 年度改正カリキュラムより、母性看護学実習と小児看護学実習を統合し、母子看護学臨地実習として新たな方法で実習を開始した。３年後期１単位（１週間）を母子の基礎的実習の機会、４年前期３単位（３週間）は母性と小児をそれぞれ２週間または１週間行う選択的実習形態をとり統合した学びを深める機会とした。本研究では、2014 年度から 2015 年度に実習を行った看護学生を対象に、①３年次から４年次への段階的実習の効果、②母子を統合した実習および４年次の選択的実習形態の効果、③今後の母子看護学臨地実習のあり方を検討することを目的にアンケート調査を実施した。その結果、段階的実習で３年次の実習が４年次の実習のイメージ化や対象理解の学びにつながる事、母子合同カンファレンスが母子看護の対象者の一連の看護を考える機会になる事、選択的実習形態が学生の実習への意欲や学びに影響する事が示唆された。

At the College A Faculty of Nursing, new practicums integrating maternal and pediatric nursing were introduced according to a curriculum revision in the 2012 academic year. The renovated courses of on-site clinical training offer opportunities to deepen comprehensive learning about maternal and pediatric nursing, granting one credit in the second semester of the junior year for the (one-week) basic maternal and pediatric practicum and three credits in the first semester of the senior year for the (three-week) maternal and pediatric nursing practicum, during which training periods can be selected (two weeks for maternal nursing and one for pediatric nursing and vice versa). In this study, a survey was conducted among nursing students who experienced the practicums between the 2014 and 2015 academic years to investigate: the effect of step-by-step training courses from junior to senior years, the effect of integrated training on maternal and pediatric nursing and selective training in the senior year, and the ideal future style of on-site clinical training on maternal and pediatric nursing. The results suggest that, thanks to the stepwise practicums, experience during the junior year helps students envision training during the senior year and

天使大学　看護栄養学部看護学科　(2016年1月5日再受稿、2016年7月25日審査終了受理)

understand mothers and children subject to nursing care. They also suggest; that joint maternal and pediatric conferences provide opportunities to consider a continuum of nursing care for mothers and children; and that the selective style of training affects motivation for student training and learning performance.

キーワード：母子看護学臨地実習、母性看護学、小児看護学、看護学生
On-site clinical training on maternal and pediatric nursing, maternal nursing, pediatric nursing, nursing student

Ⅰ．はじめに

近年の少子高齢化や入院期間の短縮化、また看護系大学の増加の影響を受け、母性看護学実習および小児看護学実習の場の確保が難しくなっている。このような背景を受け、母性看護学実習では外来・保育園など、また小児看護学実習では外来・NICU・保育園・障害児施設など実習の場が病棟以外に拡大し、教育施設により実習場や実習方法が多様化している[1)～3)]。

A大学看護学科では2012年度改正カリキュラムより、母性看護学実習と小児看護学実習を統合し、母子看護学臨地実習として新たな方法で実習を開始した。３年後期１単位、４年前期３単位として３年次を母子の基礎的実習の機会（１週間：１単位)、さらに４年次で母性と小児をそれぞれ２週間または１週間（合計３週間：３単位）行う選択的実習形態をとり段階的に学びを深める機会とした。このような実習を実施している教育施設は少なく、実習の効果についての報告は見当たらない。2014年度から 2015 年度に本カリキュラムの初回を迎えたことから、当該学年における母子看護学臨地実習Ⅰ・Ⅱの実態を把握する必要があると考える。

そこで本研究では、母子看護学臨地実習の①３年次と４年次に段階的に配置したことの効果、②母性と小児の実習を統合したこと、および４年次に選択的実習形態をとったことの効果、③今後の母子看護学臨地実習のあり方を検討することを目的とする。

Ⅱ．母子看護学臨地実習の概要

１．本実習の位置づけと目的

１）実習の位置づけ

当該学年は、２年後期に母性看護学Ⅰと小児看護学Ⅰの科目で母性・小児それぞれの基礎的学習を行い、３年前期に母性看護学Ⅱと小児看護学Ⅱの科目で看護過程演習を含む専門的学習を行う。その後、これらの学びを実践に結びつける形で３年後期に母子看護学臨地実習Ⅰと４年前期に母子看護学臨地実習Ⅱを展開することになっている。

２）実習の目的

(1)母子看護学臨地実習Ⅰ

小児看護学、母性看護学の対象である子どもとその家族および周産期にある女性とその家族の健康の維持・増進および健康の回復のために必要な生活援助の実際を理解する。

(2)母子看護学臨地実習Ⅱ

母性看護学および小児看護学の対象である子どもや周産期にある人々とその家族のニーズや健康状態を明らかにし必要な援助を実践するための看護の実際を学ぶ。

２．本実習の概要

母子看護学臨地実習Ⅰは３年後期に１単位（１週間）で配置している。母性看護学領域２日間と小児看護学領域２日間の見学実習を行い、実習終了後に合同カンファレンスで学びを共有する機会を設定し、母子の基礎的実習として位置づけている。

実習場所として、母性は産科病棟・産科外来、小児は小児病棟・肢体不自由児施設を利用している。実習内容は、患者を受け持ち、臨床指導者が行う妊婦・褥婦・新生児および子どもとその家族への看護援助の実際や処置・検査などの様子を見学するとともに、可能な範囲で学生が看護援助を実践する機会を作っている。実習終了後の合同カンファレンスは、学内において実習とは異なるメンバーで構成された４～５人のグループを編成し、各自の実習体験を通して母子看護学領域の対象者への支援のあり方を考える機会としている。方法は、提示した３つのテーマ（①母子看護学領域では、子どもが入院した家族及び新しい家族の誕生にどのような関わり（看護）が求められるか、②母子看護学領域において家族支援に必要な看護技

術、能力は何か、③母子看護学領域では、どのような場面で看護倫理が問われると思うか）の中から１つを選択し、45 分間討議し各グループの見解を３つにまとめ、発表を行っている。

母子看護学臨地実習Ⅱは４年前期に３単位（３週間）で配置している。３週間の実習のうち、母性看護学領域と小児看護学領域をそれぞれ２週間または１週間の選択的実習形態をとり、母子の統合した学びを深める実習として位置づけている。

選択的実習をするにあたり、３年次の母子看護学臨地実習Ⅰの終了後に各学生の希望を確認し、母性２週間＋小児１週間または小児２週間＋母性１週間のグループ分けを行っている。実習場所として、母性は２週間実習の学生は産科病棟、１週間実習の学生は助産院・母乳育児外来を利用している。小児は２週間実習の学生は小児病棟（重症心身障害児施設２日間含む)、１週間実習の学生は小児病棟または肢体不自由児施設を利用している。実習内容は、２週間と１週間のいずれの実習においても受け持ち患者に対する看護過程の展開を実施している。

Ⅲ．研究方法

１．対象者

2012 年度改正カリキュラムの開始時に入学したＡ大学看護学科学生で、2014 年度（３年次）に母子看護学臨地実習Ⅰと 2015 年度（４年次）に母子看護学臨地実習Ⅱを実施した 93 名。

２．研究の時期・方法・内容

１）時期

2014 年９月１日～10 月 31 日（母子看護学臨地実習Ⅰ）

2015 年５月 11 日～７月 31 日（母子看護学臨地実習Ⅱ）

２）方法

３年次と４年次の母子看護学臨地実習終了時に対象学生に対し、自記式質問紙調査を実施した。口頭と書面で研究協力を依頼し、本研究参加同意の得られた学生のデータのみ使用した。

３）内容

(1)母子看護学臨地実習Ⅰの質問紙

質問は、３年次の実習は次年度の４年次の実習へつなげるために役立ったか、事前に学習しておいたほうがいいと思ったこと、合同カンファレンスは有効だったか、実習中の健康状態の４項目を設定した。質問項目に対して「はい」「どちらともいえない」「いいえ」の３段階評定とし、自由記載欄も設けた。また、看護技術に関して、母性看護学領域と小児看護学領域でそれぞれ見学したもの・実施したものについての回答を求めた。

質問紙は実習最終日の合同カンファレンス終了後に配布し、回答後所定のボックスに投入する形で回収した。

(2)母子看護学臨地実習Ⅱの質問紙

３年次の実習は４年次の実習を行う上で役立ったかという質問について、妊産婦や褥婦・子ども・家族の理解、対象者とのコミュニケーション、入院環境の理解、看護技術の実施、実習環境への適応など 11 項目を設定した。質問項目に対し「とても役立った」から「とても役立たなかった」までの５段階のリッカート尺度で回答を求めた。これらの 11 項目は、３年次の母子看護学臨地実習Ⅰの質問紙の「事前に学習しておいたほうがいいと思ったこと」および「実習全体に関する意見」の自由記載による回答から抽出した。また、母子看護学臨地実習Ⅱの実習形態について良かった点や問題点について自由記載で回答を求めた。

質問紙は実習終了直前に配布し、実習終了後に所定のボックスに投入する形で回収した。

３．分析方法

いずれの質問紙も質問項目毎に単純集計を行い、自由記載欄の内容を精読し意味内容の類似しているものをまとめ、整理した。

４．倫理的配慮

３年次と４年次の当該実習前のオリエンテーション時に、対象者には研究の目的・方法について口頭と文書で説明し研究協力を依頼した。参加は自由意志で参加の有無が成績等に影響しない事、個人のプライバシーは保護される事、関連学会で発表する予定である事を説明し、質問紙の提出により研究参加の同意を得たとみなした。また、データ分析は、実習評価後に行った。なお、本研究は所属大学研究倫理審査の承認を経て実施した。

Ⅳ．結　　果

１．母子看護学臨地実習Ⅰ

93 人中 92 人の回答(回収率 98.9%)があった。表１に示すとおり、「見学実習は、４年次の選択実習へつなげるために役立ったか」に対する「はい」の回答は、91.4%であった。自由記載内容(23 名)では、【小児病棟・産科病棟でどのような看護が行われているかを理解することができた】（３名)、【小児病棟･産科病棟の雰囲気がわかった】(２名)、【実際に見学実習へ行って、来年の実習のイメージができた】（２名)、などの回答が認められた。しかし、【２日間では短い】（２名)、【見学・実施する内容が少なかったので、不安が残った】（２名）という意見も散見された。

また、表２に示すとおり「合同カンファレンスは、母子看護学を考える上で有効だったか」に対する「はい」の回答は、90.3%であった。合同カンファレンスは合計６回実施し 21 グループを編成した。そのうちテーマ①を選択したのは 14 グループ、テーマ②は４グループ、テーマ③は３グループであった。表３に各グループの発表内容を示した。合同カンファレンスに関する自由記載内容(22 名）では、【他の実習場の体験を聞くことができ参考になった】(７名)、【みんなの学びを聞き共有できた】（４名）などの回答が多かった。

表１．母子看護学臨地実習Ⅰにおける見学実習の有用性

回　答（n＝93）		自　由　記　載（n=23）
は　い	85 (91.4%)	・小児病棟・産科病棟でどのような看護が行われているかを理解することができた（3） ・小児病棟・産科病棟の雰囲気がわかった（2） ・実際に見学実習へ行って、来年の実習のイメージができた（2） ・見学・実施する内容が少なかったので、不安が残った（2） ・2 日間では短い（2）
どちらとも いえない	7 (7.5%)	
いいえ	1 (1.1%)	

注）３年次の見学実習は、4 年次の選択実習へつなげるために役立ったか

表２．母子看護学臨地実習Ⅰにおける合同カンファレンスの有効性

回　答（n＝93）		自　由　記　載（n=22）
は　い	84 (90.3%)	・他の実習場の体験を聞くことができ参考になった（7） ・みんなの学びを聞き共有できた（4） ・改めて考えをまとめることができた（1） ・自分の考えつかない様々な思いや考えをきけて、とてもおもしろく学びになるカンファレンスだった（1） ・みんなの考えを聞くことで視野が広がった（1）
どちらとも いえない	9 (9.7%)	
いいえ	0 (0%)	

注）合同カンファレンスは、母子看護学を考える上で有効だったか

表３．合同カンファレンスの発表内容

		1 注1）	2	3
注2）テーマ①	A	休息を促す	家族の機能、役割を把握し調整する	家族が一緒にできる育児技術の指導
	B	小児の精神的ケア	家族のケア	場所の提供（同じ悩みを持つ人とつながる場）
	C	自立支援（退院後の生活）	親に責任を感じさせない、自信を持たせる、父親の関わり	家族を含めた継続的な生活支援、地域との連携
	D	受容的で肯定的な関わり	親に寄り添う関わり	起こり得る不安を軽減する関わり
	E	退院後の生活を考えた看護	家族を理解した看護	入院環境による変化を最小限にする関わり
	F	保護者の不安やストレスへの対処	子どもができることに目をむけるための援助	家族が機能できるための援助
	G	周産期の女性への配慮	新しい家族への受容の支援	家族全員で育児ができるような支援
	H	子どもが入院した家族の不安を軽減できる関わり	入院・出産を頑張って乗り越えられた体験として捉えられるような関わり	役割獲得を促進できるような関わり
	I	付き添いの負担を軽減	母子分離の対策	出産を肯定的に受け止められる
	J	子どもへの理解と納得が得られるよう説明	精神的なフォローができる	社会資源を利用できるようにする
	K	家族の体調管理	自信が持てるような関わり	家族と関係性を築く
	L	生活の場に戻った時の事を考えて教育・指導していく	不安の軽減	家族の体調管理
	M	産む前の関わり（不安の軽減）	家族内の役割獲得を援助する関わり	退院後のサポート
	N	喜びの共感	入院中の環境づくり	退院に向けた支援
	O	家族や新生児に対する声かけ	対象者家族に対する指導・教育	不安や喜びの思いの傾聴、共感
テーマ②	A	情報提供（子どもの様子、治療内容）	知識（不安や質問に答えられるように）	環境を整える（家族の理解、地域サポート）
	B	コミュニケーション能力	観察力	知識と技術
	C	精神面のサポート	家族それぞれ役割獲得のための援助	退院に向けた関わり
	D	不安解消／教育的関わり	きょうだいへの配慮	家族の体調管理
テーマ③	A	小児の拘束の問題（自律の原則）	子どもにとって「痛くない」「もうちょっと」とは（誠実・忠実の原則）	母性における個人の考え、価値観の尊重（バースプラン、分娩時の意思確認）
	B	バースプランに基いた分娩	処置時の抑止や親の付き添い	親の決定にかたよらず、子どもの意思決定を尊重
	C	子どもの意思の尊重	自己決定（バースプラン、出生前診断）	国籍・宗教・信条にとらわれず平等に、障害の有無にかかわらず公平に

注１）グループ内での討議により得られた３つの見解を示した
注２）テーマ①は「母子看護学領域では、子どもが入院した家族及び新しい家族の誕生にどのような関わり（看護）が求められるか」、テーマ②は母子看護学領域において家族支援に必要な看護技術、能力は何か」、テーマ③は「母子看護学領域では、どのような場面で看護倫理が問われると思うか」である

表４．母子看護学臨地実習Ｉを行う前の事前学習の必要性

回　答（n＝93）		自　由　記　載（n＝63）
は　い	73（78.5%）	・小児の発達段階（20） ・新生児の生理的特徴とフィジカルアセスメント（12） ・小児・母性の基本的な知識（8） ・授業の復習（6） ・小児のバイタルサインの正常値（6） ・褥婦の進行性、退行性変化（4）
どちらともいえない	8（8.6%）	
いいえ	10（10.7%）	
未回答	2	

注）実習を終えて事前に学習しておいたほうがいいと思ったことはあったか

「事前に学習しておいたほうがいいと思ったこと」に対する自由記載内容（63 名）を表４に示した。小児領域に関することでは【小児の発達段階】（20 名）、母性領域に関することでは【新生児の生理的特徴とフィジカルアセスメント】（12 名）、両領域に共通する内容としては【小児・母性の基本

的な知識】（８名）、【授業の復習】（６名）などの回答が認められた。

なお、「実習中の健康状態」や「実習中に見学または実施した看護技術」に関しての回答も得たが、今回は分析に用いなかった。

２．母子看護学臨地実習Ⅱ

92 名中 65 名の回答（回収率 70.7%）があった。「３年次の母子看護学臨地実習Ⅰは４年次の母子看護学臨地実習Ⅱを行う上で役立ったか」について、図１に示すとおり、約７割以上の学生が役立った（「とても役立った」と「やや役立った」の合計）と回答した項目は、11 項目のうち【妊産婦や褥婦・家族への理解】(77.0%)、【入院環境の理解】(76.9%)、【子どもや家族への理解】(73.9%)、【起こりやすい事故の理解】(72.3%）であった。

選択的実習形態に関して良かった点や学べたと思う点についての自由記載内容（51 名）では、表５に示すとおり、【興味のある領域を選択し、学びを深めることができる】(17 名)、【母性と小児を続けて実習することで、妊・産・褥婦、母子関係や子どもの成長発達など継続的に学ぶことができる】(６名)、【自分で選択することで実習へのモチベーションが上がる】（３名）、などの回答が認められた。また、問題と思う点や改善点についての自由記載内容（50 名）では、【１週間コースは、学びが深められない】(９名)、【母性と小児の実習内容や記録物の量に差がある】(６名)、【母性と小児を２週間ずつ実習する方が各領域の理解が深まる】（５名）、などの回答が認められた。

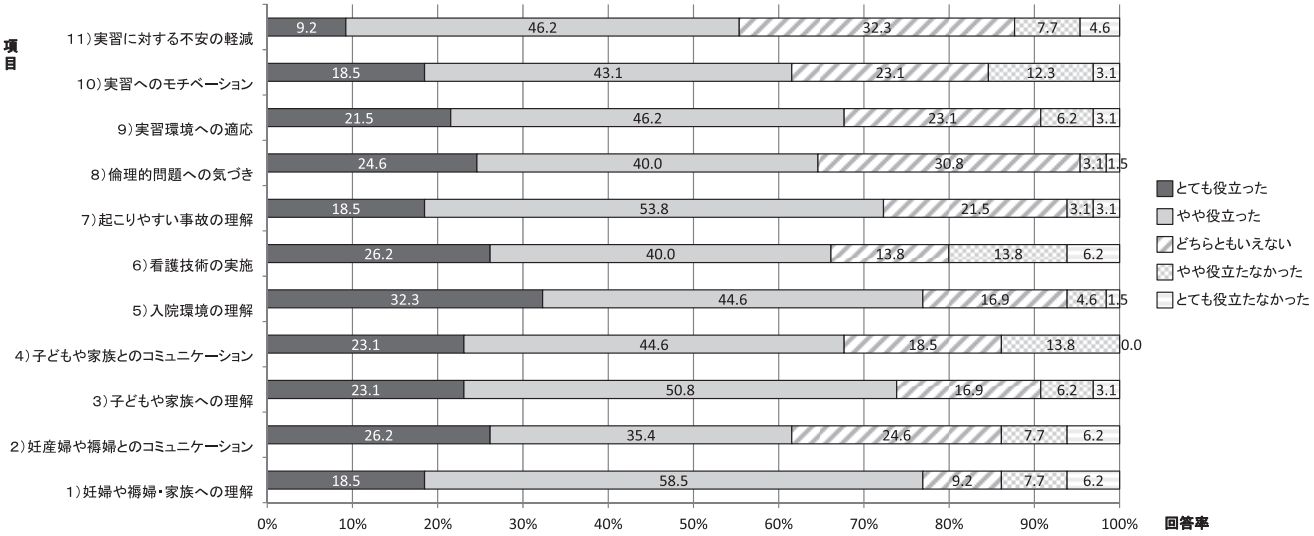

図１　母子看護学臨地実習Ⅱを行う上で役立った母子看護学臨地実習Ⅰの学び

表５．母子看護学臨地実習Ⅱの良かった点および改善点

	自　由　記　載
良かった点 (n＝51)	・興味のある領域を選択し、学びを深めることができる（17） ・母性と小児を続けて実習することで、妊・産・褥婦、母子関係や子どもの成長発達など継続的に学ぶことができる（6） ・自分で選択することで実習へのモチベーションが上がる（3）
改　善　点 (n＝50)	・１週間コースでは学びが深められない（9） ・母性と小児の実習内容や記録物の量に差がある（6） ・母性と小児を２週間ずつ実習する方が各領域の理解が深まる（5） ・選択実習は全員が希望した領域でできたほうが良い（2）

Ⅴ．考　　察

１．３年次から４年次への段階的実習の効果

母子看護学臨地実習Ⅰの終了時点で、90％以上の学生が３年次の見学実習が４年次の選択的実習へつなげるために役立つと考えていることが確認できた。自由記載で【小児病棟・産科病棟でどのような看護が行われているかを理解することができた】、【小児病棟・産科病棟の雰囲気がわかった】、【実際に見学実習へ行って、来年の実習のイメージができた】と回答しているように、臨床における母子看護の実際を見学することにより、実習に対する具体的なイメージを持つことができ、４年次の実習で実践する、受け持ち対象者への看護（看護過程の展開）を考える機会になっていると思われる。

また、母子看護学臨地実習Ⅱの終了後に、３年次の実習で役立った具体的内容を改めて調査したところ、【妊婦や褥婦・家族への理解】、【子どもや家族への理解】と回答している学生が多いことが確認された。３年次の見学実習で母子看護学領域の対象者（周産期にある女性および小児とその家族）と関わるという経験が、４年次の実習での対象理解を促すことに役立っていることがうかがわれる。先行研究では、ケア見学を通して学生は対象者についての理解を深めること[4]や、対象者の入院経過を理解している学生は、有意に看護を理解すること[1]が報告されている。これらのことから、段階的実習を取り入れた事により、特に３年次の見学実習が、４年次の実習のイメージ化や対象理解の一助となっていることが示唆された。

２．母子を統合した実習および選択的実習の効果

A 大学では、学生は２年後期と３年前期に母性看護学と小児看護学の講義で基礎的・専門的学習を行っている。講義では母性と小児を独立して行っている現状から、学生はこれらを統合して考える機会が少ないと推測される。そこで母子看護学臨地実習の中で母子を統合させるための教育上の工夫として、３年次の見学実習終了後に合同カンファレンスを行い、母子看護学としての学びを共有する機会を設定した。

調査結果から、この合同カンファレンスが母子看護学を考える上で有効であると捉えている学生が約 90％であることが確認できた。合同カンファレンスでの各グループの発表内容を概観すると、妊娠期から育児までを視野に入れた親と子どもへの入院および退院後までの関わり方や援助のあり方について考えられていた。自由記載では、多くの学生が【他の実習場の体験を聞くことができ参考になった】、【みんなの学びを聞き共有できた】と回答しており、体験を通して母子看護学領域の対象者への一連の看護について考える機会になっていたと思われる。これは、長嶋ら[5]が、母子合同カンファレンスはすでに学習したことを、実習で体験した様々な事例から実感を持って理解し、母子のつながりを学ぶ場であると述べていることと一致する。さらに、A 大学ではこの合同カンファレンスでの学びを想起しながら４年次の母子看護学臨地実習Ⅱで母子を統合した看護の実践を行うことを通して、学びを深めることが期待できる。実際、４年次に【母性と小児を続けて実習することで、妊・産・褥婦、母子関係や子どもの成長発達など継続的に学ぶことができる】という回答もみられており、母性と小児を連続して実習することにより、統合した学びにつながることがわかった。

母子看護学臨地実習Ⅱでは選択的実習の形態を導入したが、良かった点として【興味のある領域を選択し、学びを深めることができる】、【自分で選択することで実習へのモチベーションが上がる】などと回答しており、選択した領域での２週間実習という機会が、学生の実習に対する学び方や意欲に影響を与えていることが読み取れる。宮谷[6]は、実習で多くの学びを得るためには、学生が主体的に実習に臨めるような機会を作り出すことが

重要であると述べている。限られた実習期間ではあるが、方法を工夫すれば学生の希望を取り入れた実習を行うことが可能であると考えられ、４年次の選択的実習が学生の学びに好影響を与える一要因である可能性が示唆された。

３．今後の母子看護学臨地実習のあり方

１）事前学習の工夫

３年次の母子看護学臨地実習Ｉの前に必要な学習として、【小児の発達段階】、【新生児の生理的特徴・フィジカルアセスメント】をあげる学生が多かった。実習では、さまざまな発達段階にある子どもの心身の特徴を踏まえた看護を実施することになる。しかし、現代の看護学生は日常生活上子どもと関わる機会が少なく[7]、成長・発達途上にある子どもを理解し人間関係を形成していくのが難しいこと[8]が報告されている。実習で新生児および小児と関わる際には発達段階の特徴を理解する必要があることを再認識した学生は、事前学習としてこれらをあげたものと推察される。また、【小児・母性の基本的な知識】、【授業の復習】も必要な事前学習としてあげていた。学生は、実習を遂行するためには講義での学びに立ち戻る必要性を感じていたことがうかがわれる。都竹[9]は、事前学習を行なうことにより、実習に対する漠然としたイメージが具体的となり、学習した知識や技術を実習場で体験的に学びたいという意欲の向上につながると述べている。単に事前学習を促すだけでは教育効果を生むとは言い難く、工夫が必要である。今後は学生が講義と実習を結び付けて考えることができ、また、講義の段階から母子を統合した母子看護学として考えられるような事前学習を今回の結果を参考に精選していく必要があると考える。

２）段階的実習および選択的実習の充実

母子看護学臨地実習Ｉ・Ⅱの実習方法・形態に対して、３年次の見学実習では【見学・実施する内容が少なかったので不安が残った】、【２日間では短い】、また、４年次の選択的実習では【１週間コースでは学びが深められない】、【母性と小児を２週間ずつ実習する方が各領域の理解が深まる】などの意見が散見された。いずれも学生は、実習時間が短く学びが不十分であったと感じていることが読み取れる。柴[10]は、小児看護学実習において満足度に関係なく実習時間が短いと感じている学生が多いこと、また、北林ら[1]は、母性看護学実習では受持ち期間の長短と学生の理解度は関連しないことを報告している。これらを鑑みると、実習時間を増やすことよりも実習方法・形態を充実させることが学生の学びのために重要であると思われる。

前述のとおり、３年次の見学実習は４年次の実習のイメージ化や対象理解に関連してくることから、今後は母性・小児での各２日間の中で見学する内容の吟味が必要である。また、学生が短時間で対象者とスムーズに関わるために、実習初期に教員（または臨床指導者）が学生と対象者の橋渡しをすること、一緒にケアをする中でモデルを示すこと[11]を意図的に行う必要がある。加えて、学生には母子看護学臨地実習ＩとⅡが連動していることを意識化させ、３年次の実習を想起させながら４年次の実習に取り組むよう働きかけることも必要であると考える。

４年次の選択的実習は、学生の学びに好影響を与えることが示唆されたが、人数調整のため全学生が選択した領域で２週間実習ができるとは限らないという現状がある。この事は、今後も起こり得るデメリットと捉えることができる。希望どおりにならなかった学生の実習への意欲低下が懸念されるため、事前の説明を十分に行い学生の了解を得た上で実習を開始することができるように対策を立てる必要があると考える。

４．本研究の限界と今後の課題

本研究は、2012 年度改正カリキュラムの初回の

学生の実習データのみを対象としており、従来の実習との比較等は行っていない。したがって、効果について述べられることには限界があると思われる。また、調査結果の一部については天井効果が否めないことから、今後は質問紙調査の再検討を行い、縦断的なデータの蓄積・分析をすると共に、学生の具体的な学びについても明らかにし、母子看護学臨地実習の効果について検討していく必要がある。

Ⅵ．おわりに

社会の変化（少子高齢化、看護系大学増加による実習施設の不足）や医療の現状（小児科医療・産科医療機関の減少、入院期間の短縮化）を踏まえ、A 大学では従来の実習を見直し、母子看護学実習臨地実習Ⅰ・Ⅱとして母性看護学と小児看護学を統合した新たな方法で実習を開始した。今回、当該学生の実態を調査した結果、段階的実習では、特に３年次の見学実習が４年次の実習のイメージ化や対象理解の一助となっていること、母子を統合した実習の１つの方法として実施した合同カンファレンスは、母子看護学領域の対象者への一連の看護を考える機会として意味があること、選択的実習は、学生の実習に対する意欲や学びに好影響を与える一要因であることなどの示唆が得られた。一方で、学生は３・４年次で取り入れた実習時間はいずれも短く学びが不十分であると感じていること、選択的実習で一部の学生は希望どおりにならないことによる弊害などの課題も明らかとなった。

今後、母子看護学臨地実習を継続するにあたり、これらの課題を解決することはもちろん、得られた示唆をもとに実習内容や方法、および形態を十分に吟味し、体制を整えていく必要がある。

謝　　辞

本研究に協力してくださった看護学生の皆様に、お礼を申し上げます。

参考文献

1) 北林ちなみ・中山美香：母性看護学実習における学びの評価とそれに関連する因子，飯田女子短期大学紀要，28，59-70，2011.
2) 清水史恵：小児病棟以外の場における小児看護学実習での学生の学びに関する国内文献の検討，日本小児看護学会誌，21(3)，71-77，2012.
3) 芳賀亜紀子他：母性看護学実習に導入した保育園実習における看護学生の学びの検討，長野母子衛生学会誌，15，11-19，2013.
4) 柴　邦代：小児看護学実習で学生が乳幼児期の患児との融和をめざした行動の影響要因，日本小児看護学会誌，20(1)，32-39，2011.
5) 長鶴美佐子他：母と子のつながりを考えさせるカンファレンス―母性・小児看護学実習終了後の合同カンファレンスを通しての学びの分析―，第 39 回看護教育，391-393，2008.
6) 宮谷　恵：看護基礎教育の小児看護学実習における外来単独での病院実習の有用性の検討，日本小児看護学会誌，19(2)，25-31，2010.
7) 糸井志津乃・上松恵子：小児看護学実習での発達外来実習の学び，目白大学健康化学研究，6，37-42，2013
8) 小代仁美・楢木野裕美：小児看護学実習において看護学生がこどもと関わることを躊躇させる影響要因，日本看護研究学会誌，33(2)，69-76，2010.
9) 都竹友季子他：看護学生の母性看護学実習に対する意識調査（第 7 報）―母性看護学実習において看護学生が実感できる看護の魅力とは―，愛知きわみ看護短期大学紀要，8，37-43，

2012.
10) 柴　邦代：小児看護学実習における学生の満足感,愛知きわみ看護短期大学紀要,3,97-104,2007.
11) 荒木真壽美・吉田美幸：小児看護学実習における学生の不安と学びの特徴,第43回日本看護学会論文集 小児看護, 157-160, 2013.